

資 料

自閉症児の特異な描画技法の発達過程

浜 谷 直 人* 木 原 久 美 子**

ON THE EXTRAORDINARY DEVELOPMENT OF TWO AUTISTIC CHILDREN'S DRAWING DEVICES

Naoto HAMATANI AND Kumiko KIHARA

Autistic children sometimes exhibit extraordinary drawing ability in their early childhood. They are usually thought to be impaired in conceptualizing visual stimuli. We participated in day-care nursery programs of two such autistic children. Their developmental process of drawing devices was compared with that of normal children and their drawing devices were analysed from the figure and the composition of the drawings. The main results were as follows: (1) their developmental process of drawing devices skipped over the stage of intellectual realism and reached a stage of perspective drawing as early as 5; (2) they used "intellectual-realism-drawing-devices" only when human-figures were depicted. These results suggested that intellectual realism was an effective term when explaining the specificity of normal children's drawings, and that the drawing devices of normal children were acquired through the function of conception formed by practical activities.

Key words: autistic children, drawing device, intellectual realism

問 題

幼児がなぜ独特な形の絵を描くのかをめぐって様々な議論があった。そのなかで、リュケ (1979) 以来、幼児期の描画の機能的な説明として知的リアリズムという概念が広く受け入れられてきた。対象の見えと対象についての知識を対置して、子どもは見えを未だ表現できず、知識にもとずいて描くがために、大人の絵と異なるという説明である。近年これに対して批判的検討が試みられてきている。それら一連の研究は、空間関係などの表現技法について個別に詳細に検討し、幼児も場合によっては見えを描く技法を使用し、知識と一致しない技法を用いることがあることを示した。このため、幼児期の絵が独特であるのは、幼児が見えを表現できないとか、知識だけでもとずいて描くという理由では説明できず、むしろ

幼児は場面や文脈や言語指示などに応じて何らかの判断にもとずいて適切に描画技法を選択している結果と解釈すべきという見解が提出されてきている (Davis A.M. (1983), Barret, M.D. and Bridson, A. (1983), Light, P. and McEwen, F. (1987), Moore, V. (1987) など)。

これらの研究によって、あらためて学童期以降の絵に対する幼児期の絵の異質性が、子どもの用いる描画技法の傾向のちがいとして具体的に明確にされた。Freeman, N.H. (1980) は幼児期の描画技法の特徴を Canoncality と呼び、Light, P.H. and Humphreys, J. (1981) と Davis は、それぞれ技法の変化を、Array-specific から View-specific へ、Object-centered から Viewer-centered へ、と呼んでいる。5～8歳頃にそれらの描画技法の使用における転回点が存在する。これらの諸研究では比較的単純な空間関係における単一の描画技法ごとの使用の変化について明らかにしてきたが、複雑な三次元的な関係を透視画として表現するには、複数の技法の使用の傾向においてそのような転回点を経験し、しかも諸技法を

* 帝京大学 (Teikyo University)

** 法政大学 (Hosei University)

整合するように調整しなければならないだろう。このため幼児期の絵には通常、透視画的な表現はみられない(木原・浜谷(1988))。

ところが Selfe, L. (1977) は3歳代という早期から巧みな透視画を描きはじめた1例の自閉症児について報告した。また本邦の自閉症児の療育の現場においてもときどき類似の事例がみられることが伝えられる。しかし、上記のような描画発達の最近の知見はこのような事例にみられる描画発達の様相を十分に説明できない。このような事例は特異な例であるが、我々はその特異性を例外として考慮の外におくのではなく、通常幼児の描画発達とどこに共通性と異質性があるかを整理して描画発達に関する知見を得る資料としていきたいと考えている。

現在、描画発達研究の1つの主要な課題は、先に述べた幼児期から学童期にいたる過程でみられる子どもが使用する描画技法の構造的な変化と調整の背後にある心理的要因を明らかにすることであろう。Selfe の事例のように早期から透視画を描く事例について検討することがこの問題への手がかりを与えてくれるのではないだろうか。とりわけ技法の使用の変化過程について分析することによって描画の心理的機能についての示唆が与えられると考える。

現在までそのような事例についての詳細な報告は Selfe (1977, 1983) だけである。Selfe は、早期に達成された透視画の特異性という点に焦点をあてて報告しているが、描画発達全般の課題について考えるためには、それに加えてそういう自閉症児は通常の幼児が幼児期固有に用いる描画技法をどのように使用していたかなどについても検討しなければならない。そのためには、そういう事例の子どもがどのような技法を、どの程度、どのような順序で使用したかについての資料を分析する必要がある。

そこで本研究では、我々がその療育場面に関与した2例の早期から巧みな透視画を描いた自閉症児について、まず第1に描画技法の使用の順序を明らかにし、同時に、第2に描画技法の使用の対象差を分析する。そしてそれらから描画発達における幼児期から児童期への移行に関わる心理的要因について考察を試みる。

方 法

A. 対象児と絵 2名の男児の自閉症児が描いた絵と描画行動をもとに、描画技法の変化過程を分析する。筆者らは幼稚園および都内教育相談所で、この2児の幼児期に療育に参加した。2児ともに4歳から6歳頃の行動の特徴は DSM-III (1980) にある自閉症の診断基準によくあう。2児ともにこの当時指示に応じることが困難で、

課題による発達検査を実施できなかった。A児は暦年齢6歳6箇月のとき、津守式乳幼児精神発達診断法で運動(4歳6箇月)、探索(5歳)、社会(3歳、1歳9箇月)、生活習慣(4歳)、言語(4歳6箇月、2歳)であった*。B児が5歳7箇月のとき、遠城寺式乳幼児分析的発達検査で移動運動(2歳6箇月～9箇月)手の運動(3歳)基本的な生活習慣(3歳)対人関係(1歳4箇月～6箇月)発語(1歳4箇月～6箇月)言語理解(1歳2箇月～4箇月)であった。2児ともに、社会的な認識と言語的理解の遅れが大きい、対物的操作能力の遅れは小さい。2児ともに比較的軽度の発達遅滞をともなった自閉症児と位置づけることができると思う。

2児ともに描き始めてから数年間で推定で数千枚以上というおびただしい量の絵を描いている。このうち1枚の絵として未完成なものを除き、その当時の絵の特徴を代表している絵を選んで分析の対象とした。A児については4歳6箇月から9歳5箇月までに描いた絵から84枚を、B児については5歳1箇月から7歳6箇月までに描いた97枚の絵を選んだ。これらの絵は全て自発画である。描画行動の分析の資料として、A児の場合、幼稚園の担任の記録と筆者の観察記録を、B児の場合、筆者の療育日誌を参考にした。

B. 描画技法の分析基準 須賀(1976)にしたがって、絵の構造を主に図式と構図という2つの異なる水準で検討する。ここで図式とは線や円や四角形などの単純な要素から構成される、家や木や人のようなひとつのまとまりある形をもった単位である。構図とは複数の図式間の関係をもった構造であり、これによって場面がうまれる。

従来の描画発達の知見を総合すると、通常、子どもは以下のような順序を経て描画技法を獲得、使用するようになると考えられる。なお、以下に用いる描画技法の名称は必ずしも一般的に受け入れられているものではないが、論議を簡潔にするために便宜的に使用する。

(1)図式内の要素構成における描画技法 まず対象の外面を構成する諸側面のうち一側面だけを描く(一側技法)段階に始まり、複数面を並置したり重ね合わせるように接合して描く(接合技法)段階を経て、複数面が立体的に描かれる(立体技法)段階に至る。

(2)図式の描写面の選択技法 幼児はたとえば人を描く場合まずその正面を描くように、対象の全体をもっともよく代表する側面から描く(典型面技法)段階から次第に諸側面を描き分ける(面選択技法)段階に至る。

* 社会、言語において2つの発達年齢のうち前者は1～3歳、後者は3～7歳の質問紙による値を示す。

(3)画面内の図式間の構図における描画技法 最初期の子どもの絵では図式が散在するだけで構図を論ずることはできない。初期の構図では、視野の手前の対象の図式と後方の図式が画面で重ね描かれたり、後方の図式が手前の図式に対して画面上の上部に接触したり分離して描かれる。このような初歩的な図式間の関係づけを単純技法と呼ぶことにする。次に後方の図式の一部が手前の図式で隠され部分的に削除して描かれる(遮蔽技法)ようになり、ついには後方の図式は手前の図式に比べて小さく描かれる(遠近技法)ようになる。また初期の子どもの絵で、画面内で図式の上下左右の方向の基準となるのは画紙の外枠である。外枠は重力方向などの普遍的な基準に対応するものであるが、初期においてはそういう第一次の基準系は安定していない。このため画面に山などの新たな二次基準系を導入すると、子どもはそれに依存して家を山の斜面に垂直に描く(二次基準依存技法)。しだいに一次基準系が安定し、家は地平に垂直に描かれる(一次基準依存技法)ようになる。

以上の通常幼児の通常の描画技法の発達過程を例示し、分析基準としたのがTABLE 1である。2児の1枚ごとの絵についてTABLE 1に準拠して分析する。これを暦年齢ごとに4期に分けて集計する。

結 果

A. 描画技法の使用 2児それぞれ各期ごとに描画技法がどのように用いられているかを示したのがTABLE 2である。また、2児の絵の例をFIG. 1. FIG. 2に示す。(1)要素構成における描画技法 TABLE 2をみると2児ともに立体物図式では早期(5歳頃)から立体技法が出現し、接合技法はほとんど出現しないことが特徴的である。一

TABLE 1 描画技法の分析基準

○図式内の要素構成における描画技法

	立体物図式 (テーブル)	人物図式
1側技法		
接合技法		
立体技法		

○図式間の構図における描画技法
(例 人が机に向かっていてる構図)

単純技法



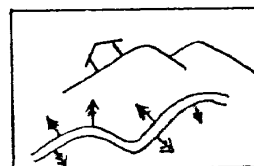
遮蔽技法



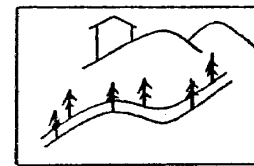
遠近技法



(例 道路沿いに木があり、山の斜面に家がある)



2次基準依存技法



1次基準依存技法

貫して一側技法と立体技法を用いて描いている。B児に接合技法がわずかに出現しているが、これは円筒型の容器を○のように○と∪を接合して描いたものに限

TABLE 2 2児の自閉症児の描画技法の変化

	暦 年 齢	絵 の 枚 数	1.図式内要素構成における描画技法							2.描写面選択技法				3.構図における描画技法				
			(ア)立体物図式			(イ)人物図式				正面 側面 背面 不明				(ア)			(イ)	
			一側	接合	立体	一側	接合	立体	不明					単純	遮蔽	遠近	二次 基準	一次 基準
A 児	4:6~5:2	24	79	0	21	89	0	0	11	33	0	0	67	4	5	0	0	0
	5:4~6:3	15	36	0	64	31	44	6	19	6	25	0	69	5	3	0	0	4
	6:6~7:3	15	61	2	37	51	21	0	28	63	7	2	28	1	14	5	0	4
	7:5~9:5	30	50	1	49	29	30	19	22	32	20	6	42	1	30	9	0	3
B 児	5:1~5:7	29	77	4	19	61	5	0	34	66	4	0	30	21	18	9	2	3
	5:8~5:11	22	59	11	30	22	56	0	22	78	0	0	22	15	13	9	0	2
	6:0~6:11	23	35	0	65	30	37	0	33	57	24	0	19	19	22	13	1	15
	7:0~7:6	22	45	2	53	26	45	0	29	53	18	1	28	12	22	19	0	16

(注) 表中の数値について、1(2)内の数値は絵の中にみとめられた図式について全て集計し、それぞれの全体に対する割合を百分率で示した。(3)の(ア)の数値は分析の基準に該当した絵の枚数を示した。(3)の(イ)の数値は分析の基準に該当した基準系がみとめられた部分の総数を示した。



FIG. 1 A児6才6か月(フェルトペン(4色))

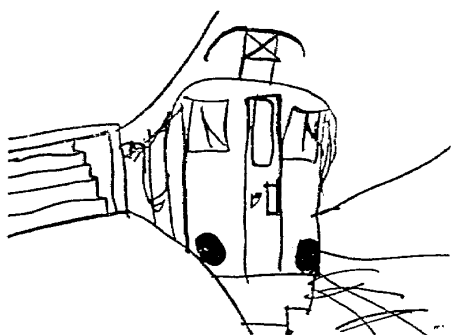


FIG. 2 B児5才10か月(フェルトペン(黒))

られる。これに対して人物図式では、一側技法に続いて接合技法が出現し両技法を用いている。A児は7歳頃から立体技法も出現したがB児は7歳になっても出現していない。このように立体物図式においては、技法使用の転回期が通常幼児に比べて特異に早い、人物図式の場合は特に早いとはいえない。

(2)描写面の選択技法 総体的に人物の正面を描く割合が高いが、2児ともに6歳頃から側面も描かれるようになり面選択技法が使われていることがうかがえる。

(3)図式間の構図における技法 2児ともに初期から単純技法と遮蔽技法を用いている。そしてA児の場合6歳半には単純技法がほとんどみられなくなり、かわって遠近技法が出現している。B児では5歳半には既に遠近技法がみられ、その後他の技法とともに用いられている。またA児の場合道路という二次基準系が5歳半に出現したときにすでに一次基準技法を用い、それ以後も二次基準技法がまったくみられない。B児の場合は初期(5歳半)に二次基準技法がみられるが同時に一次基準技法もみられ、それ以降ほとんど一次基準技法を用いている。

(4)技法の調整 2児ともに立体技法、遮蔽遠近技法、一次基準技法などを調整して5、6歳代にFIG.1, FIG.2のような一視点透視画に近い絵を描くにいたっている。

B. 描画行動の特徴 2児ともに描画行動の初発期が

4歳頃と違い。しかしその時には既に形の明確なものを描いていて、いわゆるなぐり描きがほとんどみられなかった。2児ともに4歳半頃からの1年程度は自分が描けない部分を、大人の手をとったりして完成するように要求する行動が頻繁にみられた。その一方で、5歳半頃まで大人が描き加えたり、描くように促したりするような大人からのほたらきかけには強く抵抗したり無視していた。2児ともに4歳半頃からは描いた形にときどき一語発話をともなうことがあったが、その後数年を経過してもそれ以上豊かに意味づけて大人とかかわることはできない。A児は交通標識、文字、道路やビルなどの街の光景などを好んで描いた。B児は電車や駅の光景を好んで描いた。これらは初めは自分自身の生活の場で見て描いたというより、くりかえし絵本や写真をとらして見たものをしばらく後に描いたもので、その後次第に実際に町のなかで見たものを描くようになった。

考 察

このような事例は一般的な子どもの描画のなかでどのように位置づくのだろうか。

自閉症児が独特の認知的特徴をもつことはよく知られている。Hermelin, B. (1978)によれば、自閉症児は視知覚能力そのものに障害があるというよりは、視覚的な入力を言語などに符号化して、抽象化した概念を形成することが最も特徴的に障害されているという。たしかに2児の発達の特徴もそれに合う。このことを描画という活動についていえば、自閉症児は線や面から成り立つ形を知覚し記憶し構成すること自体には特に障害はないのでその点では年齢相応の能力を発揮するが、線や面をまとりある形として意味を見付けたり意味づけることについては年齢に比べて幼い様相を示すといえるだろう。つまり通常の幼児が絵を描くときに比べて、彼らは外界からの視覚的な刺激を概念化することよりも、視覚的な形態をそのままに記憶し再生して絵にしている傾向が強かったのではないかと考えられる。

もちろんだの自閉症児もこのような特異に熟達した絵を描くわけではない。ここでとりあげた2児はたまたま描画という活動に興味を示しそれを飽くことなくくりかえして特異な絵を描くにいたった。沢山の絵を描き続けた分だけ通常幼児に比べて形を記憶し構成する能力だけが偏って発達しているのかもしれない。2児の認知発達に関する限られた資料から2例が子ども一般の描画活動のなかでどう位置づくかについて細かく議論するには限界があるが、おおまかには上のように考えることができる。

そういう2例の自閉症児の描画技法の獲得と使用過程は、通常幼児のそれと異なっていた。この点を整理して描画発達研究への意義を考えてみよう。

第1に、2児はまず対象を一側技法で描き始め、その後一側技法も用いながら立体技法、遮蔽遠近技法、面選択技法、一次基準技法を早期から使用し、それらを整合的に使用して透視画が5歳から6歳代に達成されている。一方、通常幼児は4歳から8歳頃は接合技法や単純技法、典型面技法、二次基準技法などを中心に使用しながら絵を描く。透視画が出現するのはそういう時期を過ぎてからである。このように、2児においては既に Selfe が指摘したように早期に透視画が達成されただけでなく、通常幼児期に優勢な技法を主に使用する時期がみられない点が特徴的である。

これまでなぜ子どもは接合、単純、典型面、二次基準技法などからなる絵を描くのかをめぐる長い間議論があった。2児の描画技法の獲得過程においてそういう子どもらしい技法を使用する時期がみられなかったということは、それらの技法の獲得と使用において視覚入力により高次の概念にまとめあげることが不可欠であり、そういう絵を描くにあたって子どもは見たとおりを描くと

いうよりは、それを幼児期の概念、いわば見えに対置しての知識に依拠して描いているということを示唆しているのではないだろうか。そういう意味では、この結果は知的リアリズムという用語が幼児期の絵の特徴を説明するのに有効であることをあらためて示唆するのではないだろうか。

第2は、描画対象が人物の場合は、描画技法の獲得過程における2児と通常幼児との違いはそれほど顕著ではなかった。人物図式においても通常の子どもよりは早期に熟達した技法を発揮しているが、接合技法のように幼児期独特の技法を中心に使用して描いている時期であった。FIG.3、FIG.4はそれぞれA児、B児のほぼ同時期に描いた立体物図式と人物図式であるが、これを見ると立体物図式は年齢に比べて巧みに描かれている印象を与えるのに対して、人物図式は幼児期の子どもの絵に似た印象を与える。

この点を解釈するにあたっては2児にとって生活のなかで立体物などと人物のもった意味の違いを考慮すべきだろうと考える。つまり電車や道路標識は始めは主に絵本のなかで、後には遠くから2児が一方的に眺めて楽しむ対象だったが、人物は身体を介して実践的なかわり

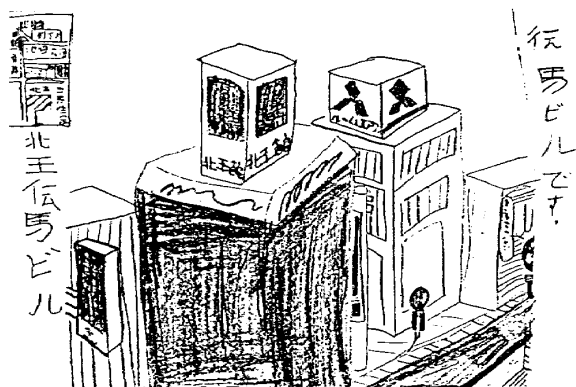


FIG. 3-a A児 立体物図式 8歳10か月

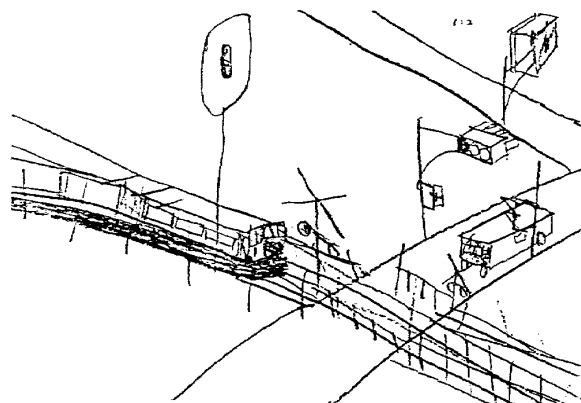


FIG. 4-a B児 立体物図式 6歳2か月



FIG. 3-b A児 人物図式 8歳9か月



FIG. 4-b B児 人物図式 6歳2か月

をもたざるをえない対象だったという違いがあった。このような対象とのかかわり方の違いが描くときに異なる態度を生み、描画技法にまで影響を与えたのではないだろうか。

実際対象とのかかわり方の差異が絵の技法に影響を与えることを示唆する報告は少なくない。幼児も対象を特によく見て描くように教示された場合は透視画を構成するような技法をより多用する (Barret and Bridson など) が、対象を操作するような経験をした後には幼児期独特の技法を多用する傾向がある (Karmiloff-Smith, A. (1981) など)。このようなことは透視画を描くとき我々は対象との経験を一時保留して、対象の与えられた瞬間における与えられた見えを忠実にコピーしている (中川 (1981)) という絵画一般についての心理学的な見解などにもみられる。そこでいう経験の保留とは対象との実践的な活動をとおしてのかかわりを控えるような態度をさすのだろう。

以上整理すると、この2例についての分析の結果は、幼児期独特の描画技法が子どもが対象を見ることによって獲得されていくものというよりは、対象との実践的なかかわりを基盤にした対象についての概念化のはたらきを通して獲得されるものであることを示唆している。一方、透視画を構成する描画技法は対象との実践的なかかわりを一旦保留して線や形を視覚的になぞることを通して獲得されることを示唆している。

最後に本研究の特徴に関連して付言したい。我々は当然のことだが2児の特異な描画発達を予期して療育にかかわっていたわけではない。したがって以上の議論は描画発達を論じるために計画的に集められた資料ではなく、自然に集められた資料をもとにして進めた。このため実証的な資料が十分でないところは多少推論によって補いながら論ぜざるをえなかった。推論の正しきことを期したつもりであるが、偏りが含まれているかもしれない。

その点は今後の批判・検討を待ちたい。そういう研究上の制約はあるが、このような貴重な事例から子どもの発達全般への示唆を得ようとする試みは意義が高いと考えている。今後、類似例の分析を相互に比較検討して考察を深めていきたい。

(謝 辞) 本研究にご協力くださったA君、B君と家族の皆様に厚くお礼申し上げます。

(付 記) 本研究をまとめるにあたり、一部、財団法人安田生命社会事業団から研究助成 (昭和61年度障害児療育関連分野) を受けた。

引用文献

- Barret, M.D. and Bridson, A. 1983 The effect of instruction upon children's drawings. *British Journal of Developmental Psychology*, 1, 175—178.
- Davis, A.M. 1983 Contextual sensitivity in young children's drawings. *Journal of Experimental Child Psychology*, 35, 478—486.
- DSM—III: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Third Edition 1980 American Psychiatric Association.
- Freeman, N.H. 1980 Strategies of representation in young children. London, Academic Press.
- Hermelin, B. 1978 Images and Languages. In Rutter, M. and Schopler, E. (Ed.), *Autism: A Reappraisal of Concept and Treatment*. Plenum Press, New York.
- Karmiloff-Smith, A. 1981 Modification in children's representational systems and level of accessing knowledge. In B. de Gelder (ed.), *Knowledge and representation*, London, Routledge, Kegan Paul.
- 木原久美子・浜谷直人 1988 三次元構造物に対する幼児の描画方略の発達 教育心理学研究, 36, 67—72.
- Light, P. and McEwen, F. 1987 Drawings as messages: The effect of communication game upon production of view-specific drawings. *British Journal of Developmental Psychology*, 5, 53—60.
- リュケ, G. H. 1979 子どもの絵 須賀哲夫 (監訳) 金子書房
- Moore, V. 1987 The influence of experience on children's drawings of a familiar and unfamiliar object. *British Journal of Developmental Psychology*, 5, 221—229.
- 中川作一 1984 目と絵の社会心理学 法政大学出版社
- Selfe, L. 1977 Nadia: a case of extraordinary drawing ability in an autistic child. Academic Press. London.
- Selfe, L. 1983 Normal and anomalous representational ability in children. Academic Press. London.
- 須賀哲夫 1976 線描の発達 児童心理学の進歩 金子書房 165—203.

(1989年4月5日受稿)